

愛知大学豊橋キャンパスの英語教育

永 瀬 美智子

私が愛知大学に赴任したのは、1999年4月のことでした。その年の4月1日に文学部は文学科を改組し、日本・中国文学科及び欧米文学科を設置したため欧米文学科のアメリカ文学を担当する教員として採用されたのです。当時、文学科には英語の教員が5人いましたが、英語学を専門とする1人以外は全員がイギリス文学を専門に研究する、典型的な旧型の「英文科」でした。ところが、改組によって学科名が「欧米」になったのでアメリカ文学を担当できる教員も必要になったということだったようです。1998年にそれまであった教養部は改組され校舎別（豊橋、名古屋、車道）に各学部・学科の4年一貫教育課程が編成されたそうですが、その改組によってそれまで教養部に所属していた教員は各学部・学科に配属されたので、同じ学部・学科に所属しながらA群（基礎教育科目）B群（基本教育科目）C群（専門教育科目）の教員という区別がありました。英語に関しては、A群（共通教養科目の英語担当）とC群（専門科目担当）の教員に分けられており、私はA群の教員として採用されましたが、アメリカ文学の専門科目とゼミも担当するという条件付きでした。

私が赴任して以来、愛知大学の英語教育はいくつか改革されてきました。振り返って現行カリキュラムと比較すると、3つ改善されたと思われるところがあります。第1に、現在も存続している外国語担当者会議のメンバーは元々A群の教員が所属する会議体で、C群の教員は専門科目のみを担当していたため、その会議体には所属していませんでしたが、現在文学部の教員はA群やC群の区別を廃止しほとんどの教員が共通教養科目と専門科目を同時に担当しているので、豊橋校舎の外国語教育に携わる教員全員が外国語担当者会議のメンバーになっていることです。これらの区別を廃止することによって文学部の語学担当の教員の負担が増えたことは否めませんが、昔英米文学専攻の中でA群の教員とC群の教員が互いに必ずしも友好的ではなかったことを考えると、現在の制度は改善されたと言えると思います。

改善されたと考えられる2つ目は、英語のカリキュラムについてです。豊橋校舎では嘱託助教や非常勤講師のネイティブ教員が全ての1年次のCommunicative English I／IIを担当しています。私が赴任当時のカリキュラムでは、1年次の英語は「基本英語I／II」と「口

語英語Ⅰ／Ⅱ」でしたが、現在の Communicative EnglishⅠ／Ⅱの前身である「口語英語」の多くのクラスは日本人講師が担当していました。グローバル化が謳われる21世紀でネイティブ教員のクラスを豊橋校舎の学生全員が履修することができているのは良いことです。また、ネイティブ教員同士の連携のためにコーディネーターを務める専任教員がいて、教材や成績評価基準を統一していることも英語教育に認められる改善点ではないでしょうか。

英語のカリキュラムに関してのもう一つの改善点は、再履修のクラスを廃止したことです。私が赴任した当時、再履修のクラスは5時限目に配置されており、前年に単位を取得できなかった学生はそのクラスを履修しなければなりませんでした。私が担当した再履修のクラスの最も多い履修者数は確か98人だったと記憶しています。それは特に再履修者が多い年でしたが、それでも毎学期60名以上の再履修者がいて再履修のクラスの英語教育の効果について疑問に思っていたものでした。現在の再履修者は下の学年の学生と一緒に一般のクラスを履修し、クラスの人数が35人程度（Communicative Englishはさらに少なく25人程度）になっているので、英語教育は昔よりはるかに充実したものになっていると思います。

私が考える3つ目の改善点は、自分の所属する学部英語教育を任せてもらえることです。私は文学部に所属する教員なので、文学部の学生の英語教育に携わるのが現在では当然と考えられていますが、私が赴任した当時は教養部のやり方が根強く残っていて、豊橋キャンパスにあった4年制の学部である文学部と経済学部の英語教育は、教員の所属する学部に関わりなく担当することになっていました。英語のクラスは文学部の学生のクラス、経済学部の学生のクラス、文学部と経済学部の学生が混じった混成クラスの3種類あって、私が担当したクラスは全て経済学部のクラスか混成クラスで、文学部の学生だけのクラスを担当したことがありませんでした。文学部に所属している教員が文学部の学生の英語教育を担当できないということに、疑問と不満を感じざるを得ませんでした。ですから、現在学部ごとにシラバスを統一したり、成績評価基準を定めたりできるようになった点は改善されたところだと考えます。

私が愛知大学で教鞭を執った26年間に大学の英語教育は随分改善されたと思います。英語教育に関わるカリキュラムや大学組織の変革に加えて、科学技術を利用したシステムの使用は私の赴任当時には考えられないものでした。E-LearningやMoodleは、導入されて初めて知ったウェブシステムでした。私は「年寄りだから使用するは無理」とは言えず、どうか使い方を覚えましたが、学生にとっては効率よく学習することのできる文明の利器だと思っています。もっと多くの学生が積極的にE-Learningを使って自主的に学習することを望んでいます。これまでの変革を振り返ると、これから愛知大学の英語教育がどのように変わっていくのかを想像することは困難ですが、現代のニーズに合わせてより良い方向へと向かうことを願っています。